菌床キノコ栽培一貫システムの構築

松阪飯南森林組合 代表理事組合長　上田和久

シイタケ生産が原木栽培から季節を問わず生産できる菌床栽培にシフトして久しく、食卓にのぼる様々なキノコのほとんどがクヌギなど広葉樹のオガ粉を固めた菌床ブロックで栽培されています。

平成６～８年度に当組合が菌床キノコ培養センターを整備したのは、長期の林業低迷と高齢化等による地域のシイタケ生産者の減少が進んだころでした。生産を開始し順調にシイタケ菌床ブロックの生産量を増やすとともにハタケシメジなど新しいキノコの生産にもチャレンジしてきました。

しかしながら、鹿の食害による苗木の生育の阻害、カシノナガキクイムシ被害の拡大、伐採作業員の高齢化、バイオマス発電の増加などにより菌床の原料となる原木の安定供給が難しくなってきました。

もともと、当地域の林業の歴史は古く18世紀の初期にはすでに人工造林が始まっていました。現在、当組合が事務所を置く松阪市の森林面積は42,957haで、うち人工林が75％を占め、その大部分が杉桧の造林地となっています。一方、木材価格の長期低迷により再造林が出来ない未植地が増加してきています。

そこで、平成30年度、農林中央金庫のみらい基金の採択を受け、菌床キノコ栽培一貫システムを構築しました。これはクヌギ・コナラ等の広葉樹の種子採取から、苗木の育成、植栽、獣害防護柵の設置、保育、伐採搬出、オガ粉の製造、菌床及びキノコ販売、廃菌床の肥料化と山林への有効利用といった循環型システムを構築し、地域と連携して原木の安定供給を確立しようとする取り組みです。

地域の元気な高齢者や授産施設の方に種子採取から苗木育成を担っていただき、その育った苗木を森林組合が購入し造林未植地に植林して育てていきます。広葉樹は15年前後で収穫ができ、皆伐しても切り株から自然に萌芽更新するため育林経費が節約できます。将来その広葉樹をシイタケ原木・オガ粉用原木として当組合の菌床キノコ培養センターで利用するというサイクルを計画的に実施することで、過疎化・少子高齢化した地域の雇用創出や地域経済にも寄与し、未植栽による山林荒廃を防止し地域の環境保全にも繋がると考えています。

現在、地域内にある授産施設で２年育てられたクヌギの苗木が皆伐後未植栽になっていた約15haの山林に植樹されすくすくと育っています。菌床キノコ培養センターで使用する原木の約３割をこのシステムで調達することを目指しています。

まだまだ小さな一歩ではありますが、定期的に未植栽山林へ広葉樹を植林していくことで、この菌床キノコ栽培一貫システムが将来に向けてよりよい循環を生み出していくことを願ってやみません。

（うえだ　かずひさ）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/